THE NEWSLETTER OF NISHINOMIYA HISTORY RESEARCH GROUP

西宮歴史調査団ニュース　第９号

西宮市立郷土資料館　兵庫県西宮市川添町15番26号　〒662-0944　電話　0798-33-1298

竜吐水製作所について

川上早苗（竜吐水班）

はじめに

2015年度からはじまった竜吐水班の活動で、調査することができた竜吐水の本体に、製作所の名前が残っているものがあった。調査を進めていくうちに、この製作所は別の場所でも見たように思う、と気になったことがあったので、製作所だけをまとめてみることにした。

写真1　竜吐水（山口町郷土資料館蔵）
製作所により、雲龍水・竜吐水・双竜水などと名づ

１．竜吐水班の活動内容

そもそも竜吐水とは、江戸時代から明治時代に使用された消防ポンプで、本体の箱（水箱）に水を汲み入れ、長く伸びた腕木をシーソーのように上下させる。腕木に連動するピストンが上下する力で支柱に支えられた筒状の柱（水管）の中を水が上がり、筒先から放水される。一般的には木製だが、明治時代以降は腕用ポンプなどと呼ばれる金属製のものも作られた。

大きな道具のため寺社や庄屋など町や村の主要な施設に備え付けられていたようで、調査に行くのもそのような場所が多い。または廃棄するにはもったいないからと地元の博物館や消防署に寄贈されるケースもある。これまでの調査で、西宮市内に木製の竜吐水9台、大正時代などの金属製のポンプ3台を確認した。

竜吐水の調査とともに地域の消防に関する施設として消防団へも調査に行っているが、現役で活動中の組織なので機材は日々更新されており、昔の道具を記念として残しているところはあまり多くはない。

２．竜吐水製作所

竜吐水本体の正面(広い面)には、所有している村や家の名前が書かれていることが多く、側面(狭い面)に購入日が書かれていたり製作所の焼印があることが多い。焼印のサイズはいろいろだが、およそ縦10cm×横6cmの名刺大ぐらいで、製作者名とその住所が書かれている。

屋外で保管されていることが多く、焼印が風化して読めない場合もあるが、書かれている製作所とその住所が現在のどのあたりになるのかを調べてみた。

①井上利兵衛

この名前は3台の竜吐水に見られた。

永福寺（下大市東町）が所蔵する天保13年(1842年)の竜吐水には、「大坂あハざ戸屋町」という地名がある。これは建具職人が多く集まっていた伊達町や箱屋町の通称の町名で、現在の大阪市西区西本町1丁目あたりになる。

また山口町郷土資料館所蔵の2台は、明治18年(1885年)7月に作られたもので、住所は「大阪あハざ上通二丁目」となっている。この町名で調べても西区西本町あたりになるため、引っ越したのではなく、明治5年(1872年)の地名改正で町名表示が変っただけだと思われる。40年ほど年代差があるので代替わりしている可能性がある。

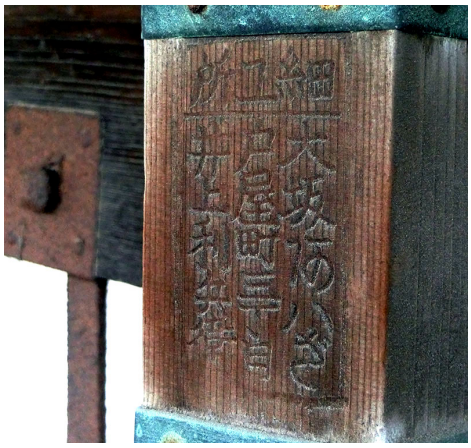
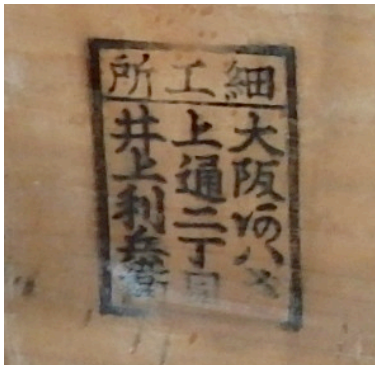
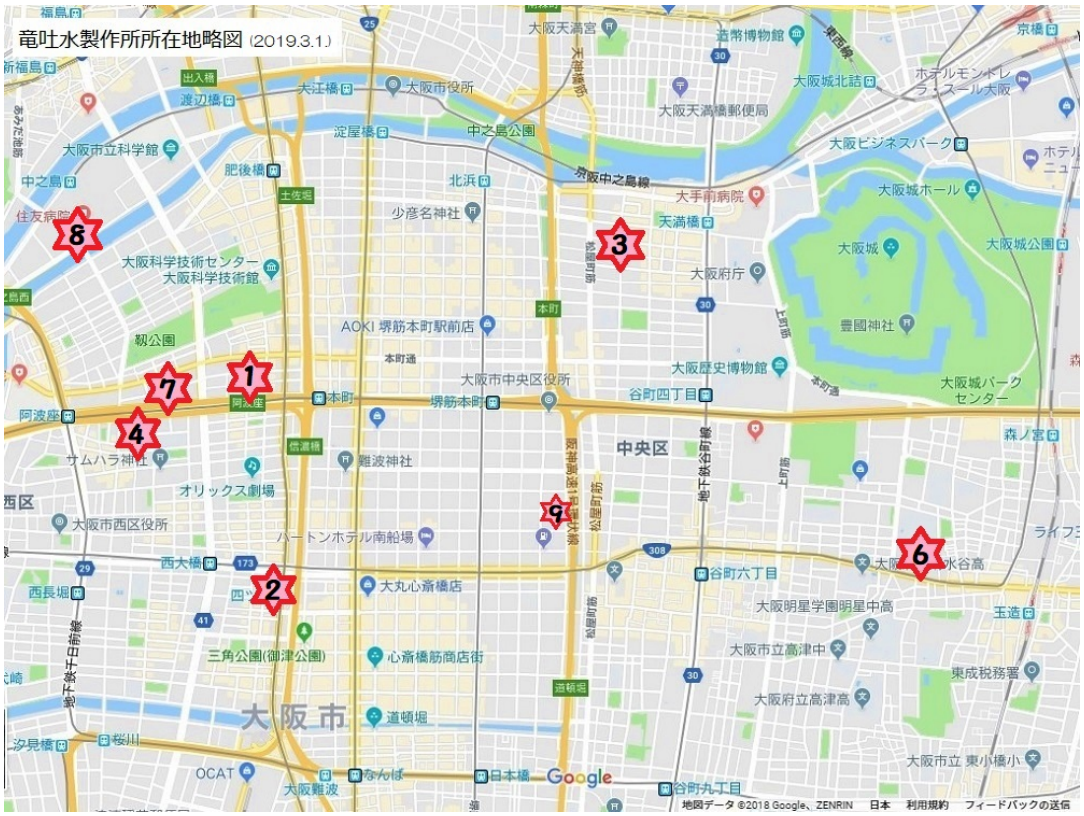


写真２　焼印拡大（永福寺）

写真３　雲龍水（山口町郷土資料館Ａ）正面



右上：写真４　側面
右下：写真５　焼印拡大



地図１　竜吐水製作所の所在地　略図（元図は、Ｇoogleマップ　約１/30000）
★印の番号は、本文中の製作所と対応している
★９は、きたむら工業所蔵品の所在地

②北村源兵衛

浄橋寺（生瀬）所蔵で、明治15年(1882年)の製造。「大坂四ツ橋西南詰南入」とあり、現在の大阪市西区北堀江一丁目あたりになる。詳細は後述する。

写真６　「北村源兵衛」銘焼印（浄橋寺）

③川邨夘兵衛

住所表記などが少しずつ違う焼印が３種類見られるが、おそらく同じ製作所の事と思われ、現在の大阪市中央区釣鐘町1～2丁目あたりになる。

尼崎藩の大庄屋をつとめた岡本家（瓦林町）の2台の竜吐水には、それぞれ「大坂天神橋一丁南川村」「大坂釣鐘町天神橋通住　川村□□□」などが見られるが、「天神橋１丁目の南にある釣鐘町の川村」「釣鐘町の天神橋通りに住んでいる川村□□□」とほぼ同じあたりを指していると判断し

て同じ製作所であろうと分類した。

明徳寺（上山口）所蔵の竜吐水には「大阪釣鐘町二丁目」とあり、製作年代不明ではあるが、同じ焼印内にある「消防器械水彈」の表現から明治時代以降のものではないかと思われる。

④平野屋

岡本家にある竜吐水の1台には、水箱に「大坂阿波本願□□前　三右衛門丁」とあり、現在の大阪市西区西本町2丁目や立売堀3丁目あたりになる。三右衛門町西の薩摩堀には廣教寺があったため、文字が読めなかった部分はおそらく「大坂阿波本願寺門前」ではないかと思われる。

また前述の「大坂天神橋一丁南川村」の小さめの焼印が水管にあり、水管の別の面には「西宮本町通□□」という焼印もある。一つの竜吐水にいくつもの名前があるのは、水箱にある焼印の平野屋で購入した竜吐水を住居の近所の西宮で修理にでも出したのかと想像するが、同じ水管にある川村銘の焼印は、どう考えたらよいものか、よくわからない。

写真７　水管の「西宮本町通」銘
（岡本家１）

写真８　水管の「川村」銘
（岡本家２）

⑤富田平吉

西宮市立郷土資料館所蔵品の竜吐水には「日本橋平松町」の住所が記されていている。また、明治2年(1869年)の製造年銘もある。市内の調査で確認できた竜吐水は、大阪で作られたものばかりだったため、はじめは大阪ミナミの日本橋かとも思ったが、調べてみると東京の日本橋とわかった。遠くからわざわざ買ったも

写真９　「富田平吉」銘（郷土資料館）

のか、東京から引っ越してきた人が持ってきたものかなどは来歴が不明のためよくわからない。

⑥大日本軽便喞筒製作所

竜吐水ではないが、西宮市立郷土資料館所蔵資料に金属製の大型水鉄砲のような消火道具があり、会社名や住所が書かれた金属製のプレートが取り付けられている。「大阪市東区岡山町三百四十一番地」は現在の大阪市中央区玉造2丁目あたりになる。

なお、喞筒（そくとう）とはポンプの意である。

⑦浪速喞筒商会

これも竜吐水ではないが、西宮市立郷土資料館所蔵の木製の大型水鉄砲のような消火道具で、竜吐水同様に本体に焼印が押されている。「大□阿□□上通三丁目」とあるので、おそらく「大阪阿波座上通三丁目」であろう。現在の大阪市西区西本町2丁目あたりで、明治時代になってからの製造と判断した。

確認調査を進めている中で、尼崎市立地域研究史料館所蔵資料(西村亀氏文書332-8)に、明治38年(1905年)に尼崎の道意新田村が消火ポンプの喞筒を浪速喞筒商会から購入した際の領収書が残っていることがわかった。その記載からも浪速喞筒商会の住所が確認できた。

写真10　「大日本軽便喞筒製作所」
（郷土資料館）

写真11　「浪速喞筒商会」銘の焼印
（郷土資料館）

⑧河野商会

西宮市消防局所蔵の大八車のような大きい車輪を持つ金属製の腕用ポンプは、竜吐水のように本体側面にいろいろ書かれている。それによると、大社村の消防組が大正2年(1913年)に新調したものとわかる。製作所の住所は「大阪市北区中之嶋五丁目」で現在の中之島6丁目あたりになる。

こちらも尼崎市立地域研究史料館所蔵資料(柳川啓一氏文書3-144)に、尼崎の大庄村が喞筒を購入した際の領収書と商品カタログがあり、そこから河野商会は明治8年(1875年)創業とわかった。

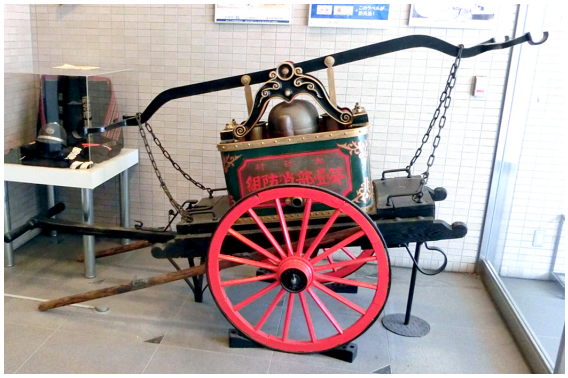


写真12　腕用ポンプ（西宮市消防局）

写真13　「河野商会」銘（同左）

３．新聞記事に見る竜吐水

私が竜吐水製作所を調べていたころ、衣笠周司班員は新聞記事に見る竜吐水というテーマに取り組み、その成果を西宮歴史調査団ニュース第8号(2018年4月14日発行)として発表したが、これを読んで驚いたことがあった。

それは明治12年(1879年)6月1日の朝日新聞の記事で、米澤家の子供たちは幼いころに、姉が鈴木町の前田家の養女になり、弟は米澤の家を継ぎ、妹は四ツ橋吉野屋橋南詰の竜吐水屋の養女になった。その後、全く会うこともなかったが、偶然四十数年ぶりに巡り会うことが出来た、というものである。

記事の中には竜吐水屋の名前は記載がないが、吉野屋橋とは四ツ橋の西側に架かっていた橋なので、その南ということは南西詰のことになる。つまり、浄橋寺（生瀬）の「四ツ橋南西詰の北村源兵衛」とほぼ同じ場所を指していることになるのである。

これが気になっていたところに、北村源兵衛の子孫が株式会社きたむら工業という会社を経営しているということが分かり連絡をとったところ、竜吐水が１台残されているということで調査に伺った。

４．きたむら工業での調査

きたむら工業の沿革は、第二次世界大戦の空襲で店舗も資料も燃えてしまって詳しいことはわからないが、平成2年(1990年)に大阪市が「大阪NOREN百年会」という創業100年以上の会社の集まりを作る時に調べたところ、天保5年(1834年)創業とわかったそうだ。江戸時代は竜吐水を作っていたが、近代になって水道事業を手掛けるようになった。ずっと四ツ橋に住まいと店舗があり、営業していたが昭和51年(1976年)に大阪市中央区玉造に移転し、今回調査に伺ったのもこちら

になる。

会社の事務所に入ってすぐの壁に大型のショーケースがあり、竜吐水が飾ってあった。焼印の名前から問い合わせがあり、先祖の家業の記念に譲り受けて残しておくことにしたそうだ。

写真14　竜吐水（きたむら工業）

写真15　焼印（同上）

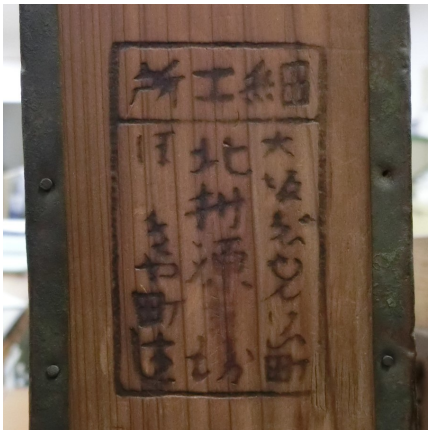


写真16　焼印（同上）

この竜吐水を調べると、焼印が「大坂順慶町一丁目」「大坂じゆんけい町ほうきや町すじ」と２種類ある。現在の大阪市中央区南船場一丁目あたり（地図１の★9）になるが、ずっと四ツ橋で営業していたのでなぜこの住所なのかは分からないという。

また明治時代の新聞記事では、次女が養子に行った四ツ橋の竜吐水屋は絶えてしまい、その後次女は消息不明だったが、瀬戸物町の寺川家へ縁付いていたのを

探し当て再会したとなっている。

このことを聞いてみると、「北村源兵衛の店は直系ではないが、養子をとりながらも続いているので、別の店のことかもしれない。ただ、寺川という親戚がいたという話を聞いたことがある」ということだった。

写真17　調査風景（きたむら工業）

ここで明治時代初期の新聞について調べると、朝日新聞は戯作者など庶民の知識層が書いた市井の出来事や芸能情報など社会面が多い小新聞（こしんぶん）に分類される大衆紙だった。今のように記者がきちんと調べて記事を書くのではなく、聞いた話を別の人が文章にすることもあり、また戯作者あがりの記者が話をおもしろおかしく脚色した可能性もないとは言えないようで、おそらく記事の竜吐水屋は北村源兵衛家の事だろうと思われるが、確定はできなかった。

※きたむら工業代表取締役の長井利恵子さん、娘の谷村真利子さん、調査にご協力いただきありがとうございました。

おわりに

このように何かはっきりわかったということはなかなかないが、市外への出張調査という新たな展開もあって面白いまとめとなった。

西宮市内に残る竜吐水そのものの調査は、ほぼ終わったのではないかと思う。だが、関連資料に調査範囲を広げると、下大市村の古文書に竜吐水購入記録や村で火事を起こしたあとの報告書類の控えなどをみつけたので、調査対象を少しずつ変えながらも、竜吐水班の活動はまだしばらく続くことになる。

◆参考文献◆

◇『日本歴史地名体系』(平凡社)　1986
◇『新消防雑学事典』東京消防庁監修　2001
◇『消防団120年史』財団法人日本消防協会編　2013
◇『江戸の火事と火消し』山本純美（河出書房新社）1993
◇『町火消たちの近代』鈴木淳（吉川弘文館）1999
◇朝日新聞デジタル「ことばマガジン」昔の新聞点検隊

西宮歴史調査団は、団員に登録した市民が主体となって、西宮市内の文化財を調査し、記録を作成する文化財調査ボランティア活動の団体です。西宮市立郷土資料館が主催しています。
西宮歴史調査団ニュース　第９号　平成３１年（２０１９）３月９日